

「旧約の信仰者たちの手本」士師たち ② (11:32~34)

これ以上、何を言いたいでしょうか。もし、ギデオン、バラク、サムソン、エフタ、
またダビデ、サムエル、預言者たちについても話すならば、時間が足りないでしょう。

(ヘブル 11:32)

■士師記の時代 (Ariel's Bible Commentary "Judges & Ruth"と聖書辞典による、作成責任は清水)

*1	士師/リーダー	時期(紀元前)*4	年数	備考	救助者?
		(1447-1407)	40	出エジプトから荒野の旅	
		(1407-1400)	7	約束の地の征服 (ヨシュ 14:7~10)	
		(1400-1390) (1390)	10	分割からクシャン侵攻迄 ヨシュアの死 110歳	
		(1390-1382)	8	アラム・ナハラタイム (メソポタミア) の王クシャンによる支配	
1	オテニエル	(1382-1342)	40		○1
		(1342-1324)	18	モアブ人による支配	
2	エフデ	(1324-1244)	80		○2
3	シャムガル	エフデと同時期		ペリシテ人からの圧迫	○3
4	女預言者デボラ	(1244-1224)	20	カナン人の王ヤビンによる圧迫	
5	バラク	(1224-1184)	40		○4
		(1184-1177)	7	ミデヤン人による圧迫	
6	ギデオン	(1177-1137)	40		○5
	【アビメレク】	(1137-1134)	3	兄弟を殺し、私的支配	
7	トラ	(1134-1111)	23		×
8	ヤイル	(1111-1089)	22		×
		(1089-1071)	18	東側アモン人*2	
9	エフタ	(1071-1065)	6	アモン人が宣戦	○6
10	イブツァン	(1065-1058)	7		×
11	エロン	(1058-1048)	10		×
13	アブドン	(1048-1040)	8		
12	サムソン	(1069-1049)		誕生は (1087) 頃*3	○7
	エリ	(1107-1067)		ペリシテ人に契約の箱を奪われて死す	
	サムエル	(1067-1020)	20	【年数 20 は、アブドン終了 1040 年から】	
	(預言者としての活動は、1067 以前から I サム 3:20)	(1047) I サム 7		エベン・エゼルの戦い	○
		(?)		サウルを王とする *5	
		(-1020)		ダビデに油注ぎ、死す・ダビデ 20 歳逃亡中	
		(1020-1010)	10	サウル王の統治後期	
		(1010-1003)	7	ダビデ王 30 歳ヘブロン	
		(1003-970)	33	ダビデ王エルサレム	○
		(970-967)	3	ソロモン王神殿着工まで	
	合計		480	I 列 6:1	

前期

後期

- *1 士師記には、13人の士師が記録されている。祭司エリ（Iサム1:3、4:18）と預言者サムエル（Iサム3:20、7:15）は、士師記に記録ないが、士師である。
- *2 9番以降の士師は、活動の領域が、ヨルダン川の東と西に分かれる。東はアモン人、西はペリシテ人の攻撃を受けたため（士10:7~8）。東ではエフタ以下4名。西では、エリ、サムソン、サムエル。
- *3 士13:1のペリシテ人の支配40年間は、サムソンが誕生する頃からエベン・エゼルの戦い迄
- *4 時期は、出エジプトを（1447）と仮定し、「年数」を当てはめたもの。おおよその推定年である。
- *5 サウルが王となった時期については、不明。
- Iサム13:1「サウルは30歳で王となり、12年間イスラエルの王であった」。原文では「サウルは〇歳で王となり、2年間イスラエル王であった」。欠けている年齢を「30」と推定し、2年間を十の位の単語が欠けていると推定して「12」年間と訳したものである。この訳では、サウルの死亡時の年齢が42歳となる。サウルが死んだときに息子のイシュ・ボシエテは40歳である（IIサム2:10）ことを見ると、この訳は誤りである。
- Iサム13:1の「2」年間を、「20」年間と推定する説や、サウルの王となった時期を、紀元前1043年頃と推定する説などがある。
- 使徒13:21では、サウロの在位期間を「40年間」としている。サウロ王が戦死した紀元前1010年から40年さかのぼると、紀元前1050年頃となる。この時期は、サムエルが士師として指導的立場にあったころである。サウルの登場は、エベン・エゼルの戦い（紀元前1047年頃）よりも後なので、サウルが王となった時期を紀元前1050年頃とするのは無理がある。「40年間」というのは、サムエルとサウルによる統治期間を通算して指していると考えられる。

■ 前回の内容 士師たち ① ギデオン

1. イスラエルの罪 → ミデヤン人たちによる圧迫（士6:1~6）
2. イスラエルの叫び → 預言者を通しての主の応答（6:7~10）
3. 救助（6:11~8:21）
 - (1) ギデオンが召される（6:11~24）・・・主の使いが現れる
 - ① 「ミデヤン人からのがれて、酒ぶねの中で小麦を打っていた」（11節）
 - ② この状況から、ギデオンは勇敢な人ではないことがわかる。
 - (2) バアルの祭壇を取り壊す（6:25~32）
 - ① 七歳の「第二へシャナー」の牛 → 七歳の特上の牛
 - 「七歳」は、ミデヤン人による支配が続いた期間7年と重なる。
 - ② 「町の人々」（27、28、30節） その町の諸事を決定する際の会衆（男たち）
 - ③ 会衆がギデオンの処刑を求めたとき、父ヨアシュはそれがいかに愚かなことであるかを「質問」の形で示す。
 - 「あなたがたは、バアルのために争っているのか（バアルの側に立って訴訟を申し立てているのか）？」＝「バアルは、神でありながら、人間に自分の問題を告発してもらわねばならないのか？」
 - 「あなたがたは、バアルを救おうとするのか？」＝「バアルは、神でありながら、人間に自分を救って（または擁護して）もらわないといけないのか？」
 - ④ この2つの質問に続いて、ヨアシュは、次のように結論を述べる。
 - バアルのために争う者は（バアルの側に立って訴訟を申し立てる者は）、【真の神によって】、朝までに殺されてしまう。

- もしバアルが神であるなら、自分の祭壇が取り壊されたのだから、自分で争えばよい(もしバアルが本当に神ならば、人間によって擁護してもらう必要などない)
 - ⑤ ヨアシュは、息子のギデオンのしたことを見て、自分が偶像礼拝に陥っていたことを考えなおしたようである。
 - (3) 軍団召集 (6:33~35)
 - (4) 羊の毛のしるし (6:36~40)
 - (5) 両軍の布陣 (7:1)
 - (6) イスラエル軍の削減 (7:2~8)
 - ① 1回目の削減 (7:2~3) 恐れる者を帰す (申 20:8)
 - ② 2回目の削減 (7:4~6) 注意深くない者をベースキャンプで待機させる
 - 5節 別に分けるべきグループについての2つの条件
 - ☐ コル「~する者を全部」びちゃびちゃと水を舌でなめて飲む、犬が水をびちゃびちゃと飲むように、
あなたは彼らを別にしておかねばならない。
 - ☐ コル「~する者を全部」「たとえ~するとしても」水を飲むために、ひざをつく。
【そうせよ】=別にしておけ・・・これは原文になく、翻訳時の付加。
 - 泉で水を飲むときには、全員がひざをついてかがむ。
 - そのうち、両手で水をすくい、その水を口にもって行って、舌でなめるように飲んだ者は、300人。
 - その他の者は、ひざをついてかがむまでは同じ。そのまま顔を水につけて、がぶ飲みした。
 - ③ 300人 (7:7~8)
 - (7) ミデヤン連合軍の陣営内を偵察 (7:9~14) 「もし・・・恐れるなら」(10節)
 - ① この時点でも、まだギデオンは内心、恐れをもっていたことがわかる。
 - ② 敵軍の中で「夢」と「その解釈」を聞いて、心が決まる。
 - (8) 戦いの準備 (7:15~18) 剣は持っていない
 - (9) ミデヤン軍陣営への夜襲 (7:19~23)
 - (10) エフライム族への召集 (7:24~25)
 - (11) エフライム族からの抗議 (8:1~3)
 - (12) スコテの町からの冷遇 (8:4~7)
 - (13) ペヌエルの町からの冷遇 (8:8~9)
 - (14) ミデヤンの二人の王、ゼバフとツアルムナを捕らえる (8:10~12)
 - (15) スコテの町に対する処罰 (8:13~16)
 - (16) ペヌエルの町に対する処罰 (8:17)
 - (17) ゼバフとツアルムナの処刑 (8:18~21)
4. ギデオンの士師職と平穏な時期 (8:22~32)
- (1) 22~23節 王になることは拒む
 - (2) しかし、王のような行動をとる傾向があった
 - ① 24節 戦士たちが全員、ギデオンに服従する象徴的行為になる
 - ② 26節 金(約20kg、現在価値93百万円)、さらにおびたらしい宝石、王の衣

- ③ 30節) 大ぜいの妻と70人の息子
- ④ 31節 息子のひとりの名 「アビメレク」=わが父は王なり
- (3) 27節 祭司でもないのに、エポデを作る
 - ① エポデは、大祭司が幕屋で着用するもの(出28:6~29)
 - ② 幕屋は、当時、シロにあった。(ヨシュ18:1、士18:31、21:19)
 - ③ ギデオンが、自分の町オフラでこれをして主に伺いを立てるとか、犠牲を捧げたとすると、律法違反 → イスラエルの民がバアルなどの偶像崇拜に陥る下地となる → 「イスラエルはみな、それを慕って、そこで淫行を行った」
 - ④ 「ギデオンとその一族にとって、落とし穴となった」→ 9章アビメレク事件

■ 本日の内容 士師たち ② バラク

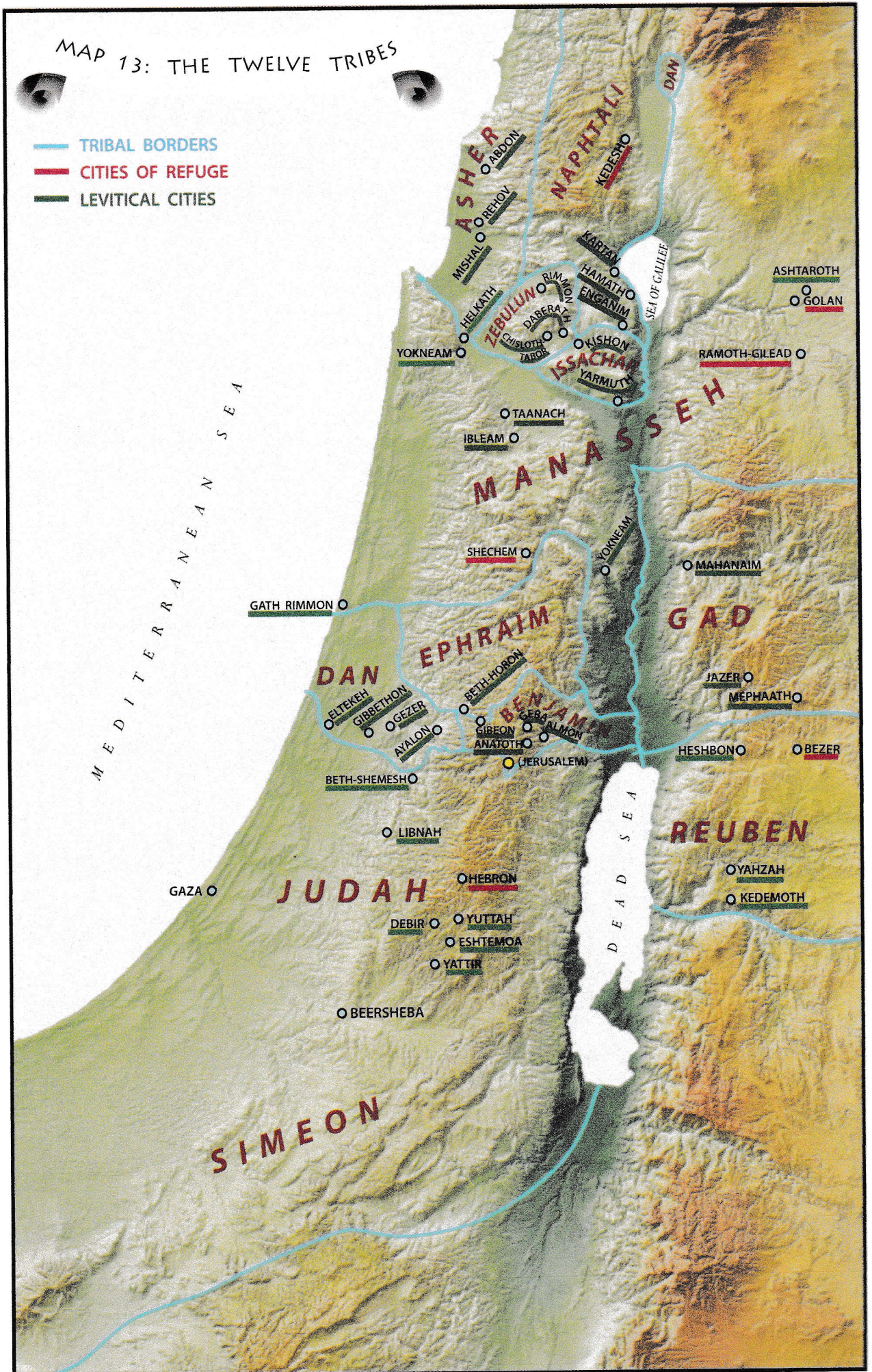
1. イスラエルの罪 → カナン人、ハツオルの王ヤビンによる圧迫(士4:1~2)
 - (1) ヤビンは個人名ではなく、ハツオルの王の称号
 - ① 町の位置: ガリラヤ湖の北、フラーの谷の南端。
 - 古代の交易路「ヴィア・マリス(海の道)」における交通の要衝のひとつ。東のメソポタミアと南のエジプトを結ぶ幹線道路。
 - 東のメソポタミアから来て、ダマスコを通り、ハツオルに至る。
 - ハツオルから、ガリラヤ湖の西からイズレエルの平野に入り、そこを抜けるとメギド。メギドの丘からは、イズレエル平野が一望できる。
 - メギドから、地中海沿岸に出て、海沿いの道を南下してエジプトに至る
 - ② ヨシュア記11:1~15
 - ヨシュアの指導のもと、ヨルダン川を渡り、エリコを攻略。
 - このあとの7年間の征服戦争は、前半がエフライムの山地、後半がガリラヤ湖周辺の北方で展開された。
 - このとき、ハツオルの王は、北方の諸民族(カナン人、エモリ人、ヘテ人、ペリジ人、エブス人、ヒビ人)による連合軍のリーダーであった。
 - ヨシュアはこの町を破壊したが、占領はしなかった。カナン人は、あとで戻ってきて、この戦略上重要な地に町を再建した。
 - (2) 将軍は、シセラ。シセラは個人名。ただし、カナン人の名ではなく、ヘテ人の名。
 - ① シセラは、ヘテ人のような名をもったカナン人であったか、ハツオルの王に雇われていたヘテ人傭兵のリーダーであったか、いずれかである。
 - ② 彼の住まいは、ハロシェテ・ハゴイム(異邦人のハロシェテ)にあった。ガリラヤのどこかにあった町である。
 - 将軍の住まいがあった町をわざわざ記録していること、鉄の戦車900両を保有していたこと、「自分といっしょにいた民」が住んでいたことなどを考え合わせると、彼の住まいは宮殿のように大きかったと推定される。
 - 町の名にわざわざ「異邦人の」とつけるのは、一帯地域におおむねイスラエルの部族が住んでいるものの、その町は異邦人の町となっていることを示している。
2. イスラエルの叫び(4:3)
3. 救助(4:4~24)
 - (1) デボラとバラクが召される(4:4~10)

- ① ラピドテの妻、デボラ (4 節)
- ラピドテは、「燃えるランプ」の複数形、「稲妻」の意味もある。
 - バラクは、「稲妻」。バラクとラピドテは、同じ意味のことば。
 - ユダヤ教ラビの伝承では、バラクとラピドテは同一人物であり、デボラはバラクの妻であるとする。
- ② ナフタリのケデシュ (6 節)
- ガリラヤ湖の西側から北部にかけての地域は、ナフタリ族の割り当て地 (ヨシュア 19:32~39)
 - 士師記の当時は、ケデシュという町は、2 か所ある。ハツオルの北側の「ケデシュ」に対して、ガリラヤ湖の南端近くに位置する町を「ナフタリのケデシュ」と呼んだ。
 - バラクは、ナフタリ族であり、「ナフタリのケデシュ」に住んでいた。
- ③ タボル山に進軍せよ。ナフタリ族とゼブルン族のうちから 1 万人 (6 節)
- 戦場となるのは、タボル山から南西に下ったイズレエル平野の中央部で、キシオン川の流域。ここは、ゼブルン族の地域。
- ④ バラクの要請 (8 節)
- ギデオンとは違い、バラクが躊躇したり、恐れしたりしたという記事は全くない。5:15 ではバラクは戦場で「谷の中を突進した」とある。彼が臆病者でないことは、文脈上推定される。
 - バラクがデボラに同行を求めた理由は、信仰である。神がともにおられることが勝利の条件であることを、バラクは明確に心得ていた。主の預言者であるデボラに同行を求めたのは、そのためである。
 - デボラは、同行はしたが戦闘はしていない。実戦を指揮する者は、バラクであった。(4:14)
- (2) ケニ人へベルの動き (4:11) と将軍シセラの出陣 (4:12~13)
- ① モーセの義兄弟のホバブの子孫
- ケニ人は、ミデヤン人の支族で、モーセの妻の出身部族。
 - 「義兄弟」カウザン・・・原意は、「娘を嫁にやって同盟関係になること」、義理の兄弟、義理の父などの関係を表す。
 - 士師記 1:16 では、ユダ部族の割り当て地の近く、ネゲブ地方のアラドに住んだ。
 - ケニ人は、本来は、イスラエルと友好的な関係にあった。しかし、へベルは、「ハツオルの王ヤビンとケニ人へベルの家とは親しかった」(4:17) とあるように、カナン人に近づき、反イスラエルの立場をとった。
- ② ホバブの子孫のカインから離れて
- 「カイン」は、創世記 4:1 の人名「カイン」と同じヘブル語である。
 - カインは、ケニ人を指すこともある。
 - ここでの「カイン」は、ケニ人である。
 - へベルは、他のケニ人から離れて、南のアラドから、遠くガリラヤ湖南端の (ナフタリの) ケデシュの近く、ツァアナニムまで移動してきた。
 - その目的は、ケデシュにいるバラクとイスラエル軍の動静を監視し、ハツオルの王ヤビンを通して将軍シセラに知らせるためであったと推定される。 → 12 節「シセラは、バラクがタボル山に登った、と知らされた」

- ③ シセラは、全軍をキシオン川に呼び集めた (13 節)
- キシオン川流域のイズレエル平野。
 - 戦車を主力とする大軍にとっては、山地よりも平野が有利。軍を動かす時期は、常識的に乾期。
- (3) カナン軍の敗北 (4:12~16)
- (4) 将軍シセラの逃亡と死 (4:17~22)
- (5) ハツォルの王ヤビンの衰亡 (4:23~24)
4. デボラの歌 (5:1~31a)
- (1) 歌い手 (5:1)
- ① 歌い手は、デボラとバラク
 - ② 作詞・作曲は、デボラ (5:7「私、デボラ」)
- (2) 歌の内容
- ① 神をほめたたえる (2~3 節)
 - 「イスラエルで髪の毛を乱すとき」→「イスラエルの指導者たちが立つとき」
 - 「民が進んで身をささげるとき」=イスラエルの民が指導者たちの指導に進んで従うとき (9 節にも同様の表現が出てくる)
 - 「聞け、王たちよ。耳を傾けよ、君主たちよ」 デボラが異邦人の王たちに宣言している。
 - ② ヤハウエ主が、戦われる (4~5 節)
 - ③ デボラが士師として立った頃のこと (6~8 節)
 - ④ 神をほめたたえる (9~11 節)
 - ⑤ イスラエル各部族の応答 (12~18 節)
 - 14 節「その根がアマレクにある者もエフライムからおりてきた」
 - 「アマレク」はヘブル語写本の誤りであろうと推定される。旧約聖書の記述の中で、エフライム族が異邦人のアマレク族と何らかの血縁関係があったことを示す箇所はない。
 - 正しくはヘブル語の「エメク」(谷)であったと仮定すると、この箇所の意味は、「エフライムの山地にいたエフライム族は、谷=イズレエルの平野に、勇敢に下ってきた」、と読むことができる。
 - デボラの出身部族は、エフライム族である (4:5)。
 - ⑥ カナン軍の敗北 (19~23 節)
 - ⑦ ケニ人ヘベルの妻、ヤエルを称賛する (5:24~27)
 - ⑧ 将軍シセラの母の心配 (5:28~30)
 - ⑨ 結びのことば (5:31a)
5. 安息 (5:31b)
6. 結論：バラクの信仰の手本
- (1) 自分で画策せず、神の召命を待つ。
 - (2) 戦いに勝利する条件は、神がともにおられることであると心得ている。
 - (3) ひとたび神の召命を受けると、躊躇なく勇敢に戦う。
 - (4) 自分の手柄にはならないと言われても構わず、自分の使命を果たす。

MAP 13: THE TWELVE TRIBES

- TRIBAL BORDERS
- CITIES OF REFUGE
- LEVITICAL CITIES



MAP 16: THE EARLY JUDGES

- ➔ EHUD
- ➔ DEBORAH & BARAK
- ➔ CANAANITE FORCES
- ➔ GIDEON
- ➔ ABIMELECH

